『高等教育開発』

第1号～第5号 投稿論文の傾向

徳島大学 高等教育研究センター

吉田　博

『高等教育開発』（特徴一部抜粋）

◆2021年度より刊行開始　（現在、第5号まで発行されている）

◆投稿論文は**査読付き**とし、原稿種別は**「論文」及び「報告」のみ**とする

◆原稿は**随時募集**とし、概ね1月15日までに採録が決定しているものを、当該年度号に掲載する

◆原稿の言語は**和文**に限る

◆原稿の分量は、原則8ページ以内とする。ただし、査読対応における修正投稿については、**最大10ページまで可能**である。

◆**同一執筆者**（共同研究の代表執筆者を含む）による投稿は、**1号につき1編のみを掲載**

◆投稿原稿については、**必ず投稿テンプレートを活用して作成**する

https://www.jaedweb.org/journal（2026.5.15.）

原稿の種別

論文（投稿論文）

- 高等教育における教育開発に関して、問題意識を背景とし、**先行研究に基づく研究課題を設定し、それを適切な研究方法を用いて達成した諸論文**。高等教育開発研究の発展もしくは、高等教育開発実践に役立つ内容であることが期待される。事例研究や実践研究も含まれる。

報告（投稿論文）

- 高等教育における教育開発に関して、**実践内容を報告する**もの。カリキュラム開発、授業開発、教育開発のための組織開発、資料（カリキュラムマップ、シラバス、ルーブリック、チェックリスト等）開発等、**背景や実践方法**（教授方法や評価方法の工夫を含む）、**内容、結果、課題と展望についてわかりやすく述べたもの**。

その他（投稿ができない種類）

- 第5号では、**特集「大学執行部から見た教学運営」として、編集委員会から依頼した5編の論文が掲載**されている。

これまでに掲載された投稿論文（論文6編、報告7編）

第1号

【論文】学生参画型FD活動SCOTプログラムに参加する学生の特徴

【論文】教育活動の振り返りを目的としたティーチング・ポートフォリオ・チャートおよび作成研修の開発と評価

【報告】理工系講義形式授業に関するFDプログラム開発

【報告】大学のIR担当者養成研修の成果と課題―研修転移に着目して―

【報告】日本版CTL セスメントツールの開発

第2号

【論文】指導者としてのSAはいかに成長していくか

【論文】大学教育におけるクラス担任制の課題―クラス担任へのアンケート調査結果から―

第3号

【論文】学習支援活動が学生スタッフの能力開発に与える効果

【報告】日本の大学教育センター等の現状と課題―日本版CTLアセスメント基準を枠組みとした分析をもとに―

【報告】教職協働による不登校学生への支援事例を用いた教職員研修プログラムの開発

第4号

【論文】教学マネジメントの推進アクターに求められる役割・知識・経験

【報告】理工学教育に関わる教員に必要な能力開発プログラムの構築

【報告】気軽に参加できるオンラインFDセミナーの開発とその評価

研究テーマ

原稿種別	研究テーマ	特定の活動を行う学生の能力開発や成長過程を明らかにするもの	教育制度や組織などの課題や実態を明らかにするもの	FDや研修プログラムの開発やその効果を検証をしたもの	教育開発に関わるツールの開発
論文	学生参画型FD活動に参加する学生の特徴	○			
論文	TPチャート及び作成研修の開発と評価			○	
論文	SAの成長過程の可視化	○			
論文	クラス担任制の課題		○		
論文	学習支援に携わる学生の能力開発	○			
論文	教学マネジメント推進アクターの役割・知識・経験		○		
報告	理工系FDプログラム開発			○	
報告	IR担当者養成研修の成果と課題			○	
報告	日本版CTLアセスメントツールの開発				○
報告	日本のCTLの現状と課題		○		
報告	不登校学生への支援事例を用いたFD開発			○	
報告	理工学教育に関わる教員に必要なFDの構築			○	
報告	オンラインFDの開発と評価			○	

研究のフィールド

原稿種別	研究テーマ	所属組織における実践や業務	自身の研究テーマや実践・関心	科研費などの研究助成との関連
論文	学生参画型FD活動に参加する学生の特徴	○		
論文	TPチャート及び作成研修の開発と評価		○	
論文	SAの成長過程の可視化	○		
論文	クラス担任制の課題		○	○
論文	学習支援に携わる学生の能力開発	○		○
論文	教学マネジメント推進アクターの役割･知識･経験		○	○
報告	理工系FDプログラム開発		○	○
報告	IR担当者養成研修の成果と課題	○		○
報告	日本版CTLアセスメントツールの開発		○	◎
報告	日本のCTLの現状と課題		○	○
報告	不登校学生への支援事例を用いたFD開発		○	◎
報告	理工学教育に関わる教員に必要なFDの構築	○		
報告	オンラインFDの開発と評価	○		

※◎はJAEDの課題研究事業による助成を受けたもの

研究テーマと論文種別

研究テーマ	論文	報告	科研費などの研究助成の有無
①特定の活動を行う学生の能力開発や成長過程を明らかにするもの	3	0	1
②教育制度や組織などの課題や実態を明らかにするもの	2	1	3
③FDや研修プログラムの開発やその効果を検証をしたもの	1	5	3 （うち1件は◎）
④教育開発に関わるツールの開発	0	1	1(◎)

実態解明に関するテーマは論文に多く、FDやツール開発は報告に多い傾向がある

※◎はJAEDの課題研究事業による助成を受けたもの

①特定の活動を行う学生の能力開発や成長過程を明らかにする研究

★先行研究に基づく研究課題の設定（研究目的）・価値や意義の説明

原稿種別	研究テーマ	研究課題の設定、研究の目的、研究の意義の説明
論文	学生参画型FD活動に参加する学生の特徴	学生が正課外における実践コミュニティに参加することには意義がある。SCOTも実践コミュニティとしての特徴を持つ。しかし、理系学生はコミュニティへの参加に対して消極的との指摘されている（先行研究）。そこで、理工系大学でにおけるSCOT生の学びの様子や特徴を明らかにする（研究目的）。このことはSCOTプログラムの質向上に有効である（研究の意義・価値）。
論文	SAの成長過程の可視化	日本におけるSA研究は、SAはあくまで授業「補助者」であるとするものが多く（先行研究）、米国では、SAは「指導者」として位置づけている。しかし、学生に対する教育指導に学生自身を活用するという理念に従えば、SAを単なる「補助者」として活用するだけでなく「指導者」として活躍してもらうことも検討すべきである（研究の意義・価値）と考える。そこで、日本における指導者としてのSAの成長について明らかにする（研究目的）。
論文	学習支援に携わる学生の能力開発	学生による学生支援は利用学生の問題解決だけでなく、支援する学生の学びと成長が期待されている。しかし、先行研究では学生支援活動の期間や回数が限られていたり、学習支援以外の生活支援や高校生との交流などが含まれている（先行研究）。本研究では、セメスター単位で学習支援に携わる学生を対象にして学生の能力開発を見る（研究目的）。

①特定の活動を行う学生の能力開発や成長過程を明らかにする研究

★調査対象や方法・分析方法や妥当性の説明・考察

研究テーマ	調査対象	調査方法	分析方法	考察方法
学生参画型FD活動に参加する学生の特徴	SCOT生(比較対象として、教職課程の履修生4年・大学院生)	• アンケート調査(経験学習型リーダーシップ行動尺度(木村ほか2019)) • SCOT生の作成資料(学んだことなど)	アンケート結果を因子分析する	因子分析の結果(学生の認識)と実際の活動(SCOT生の作成資料)を使って考察する
SAの成長過程の可視化	ある演習科目のSA 23名(15クラス同時開講)	半構造化インタビュー(11項目;応募のきっかけ、感想、研修役立ち度、支援内容、他のアシスタントや教員との連携、困難、その解決法など)	質問統合法:①データの単位化、②グループ化、③論理的関係を構造化、④具体ストーリーを代表データで表す叙述化(山浦2008;山浦2017)を参照する	補助者としてのSA(岩崎2008)と指導者としてのSAの違いを成長という観点で考察する
学習支援に携わる学生の能力開発	学習支援活動を担う学生スタッフ20名	半構造化インタビュー(傾聴力や伝達力、協働力、問題発見・解決力の変化の有無とその理由、それらを実感できる経験や考え方の変化)(コウイー・ウォレス(2009)のピア・サポートモデルを参照)	量的分析:傾聴力と伝達力を発揮できた頻度、学習支援活動によるこれらの能力の変化の有無など、その他いくつかの項目を数値化して平均値を分析 質的分析:グランデッドセオリー(グレイザー・ストラウス1996)に基づく、データのコード化、コアカテゴリーの抽出、コアカテゴリー間の関連性の構造化	調査分析対象とした4つの能力(傾聴力や伝達力、協働力、問題発見・解決力)ごとに、質的分析結果と量的分析結果をもとに考察をする

②教育制度や組織などの課題や実態を明らかにするもの

★先行研究に基づく研究課題の設定（研究目的）・価値や意義の説明

原稿種別	研究テーマ	研究課題の設定、研究の目的、研究の意義の説明
論文	クラス担任制の課題	クラス担任制を導入する大学は増えている。しかし、先行研究でクラス担任制の課題はいつくか指摘されているが、**クラス担任を対象とした調査になっていない（先行研究）**。そこで、**クラス担任を対象として調査し、クラス担任が担う業務（担任業務）の課題を明らかにする（研究目的）**。これにより、**担任業務の実施環境の改善に寄与する知見を得る（研究の意義・価値）**。
論文	教学マネジメント推進アクターの役割・知識・経験	大学教育政策において「教学マネジメント」の重要性が指摘されている。教学マネジメントに関する先行研究では、必要な資質や能力、また人材配置の必要性は指摘されているが**具体的な調査に基づくものではない（先行研究）**。そこで、**教学マネジメントに関わる人材（アクター）を調査協力者として、必要な役割・知識・経験を調査する（研究目的）**。
報告	日本のCTLの現状と課題	日本の大学では、FDや教育改善を目的としたCTLが設置されている。これまでの（執筆者らの研究において）CTLの現状を把握するための**「日本版CTLアセスメント基準」を開発してきたが、有効性の検証やベンチマークの開発が課題として残されていた（先行研究）**。そこで、**「日本版CTLアセスメント基準」を用いて、これによって本基準の有効性の検証と日本のCTLの特徴と課題を明らかにする（研究目的）**。

②教育制度や組織などの課題や実態を明らかにするもの

★調査対象や方法・分析方法や妥当性の説明・考察

研究テーマ	調査対象	調査方法	分析方法	考察方法
クラス担任制の課題	調査代行会社に登録している大学教員のうち、当該年度にクラス担任を務める教員	アンケート調査（基本属性、担任業務において困ること・難しいと感じること（記述））笠井（2015）を参考に作成	KHCoderを用いた計量テキスト分析（樋口2014）を行う。また別の研究者がKJ法による整理を行い、2つの方法による分析を用いて、ラベルとグループ化を著者ら3名で行う。	先行研究で示唆されている課題と比較しながら考察を行う
教学マネジメント推進アクターの役割・知識・経験	機縁法によって選定した20の国公私立大学の教学マネジメントを推進するアクター	個人またはグループによる半構造化インタビュー（大きく分けて2項目：「役割」と「知識・経験」）	箕浦（2009）、岩崎（2020）の手続きを参考にして、①分節で区切りオープンコーディング、②カテゴリーの作成、③カテゴリーグループの作成、④ストーリーラインにまとめる。複数の研究者で確認し客観性を担保する。	インタビュー項目である「役割」と「知識・経験」に分けて分析結果を考察する
日本のCTLの現状と課題	日本のCTLに所属し、過去に基準を用いたWSに参加した経験のある教職員のうち、調査者間で協議し候補を絞る	半構造化インタビュー（基準の3カテゴリーに沿ったCTLの特徴や課題、基準そのものの意義や課題）	発話データをもとに基準の3つのカテゴリーごとに分類し、その下位項目である観点（35観点）を、類似するいくつかにまとめながら整理する。	基準の3つのカテゴリーとその下位項目であるいくつかの観点ごと記述内容をもとに整理・考察していく

③FDや研修プログラムの開発やその効果を検証をしたもの

★先行研究に基づく研究課題の設定（研究目的）・価値や意義の説明

原稿種別	研究テーマ	研究課題の設定、研究の目的、研究の意義の説明
論文	TPチャート及び作成研修の開発と評価	TPチャートは、TP導入段階で使用したり、TP体験ツールとして使っている。近年は、TPチャート作成WSや研修ニーズが増えてきているが、**TPチャート単体での作成効果や研修効果は検討されていない（先行研究）**。そこで、**TPチャート作成及び作成研修の効果について検討を行う（研究目的）**。これによって、**TPチャート単体の作成研修がより妥当性を持って普及する一助となることが期待される（研究の意義・価値）**。
報告	理工系FDプログラム開発	アクティブラーニング（AL）の推進が進められているが、理工系基礎科目の特徴から、一方向的な知識伝達になりやすい傾向がある。そこで**理工系講義形式科目に焦点を当て、ALを取り入れたFD**を開発してきた。**FD開発の経緯を整理するとともに、参加者アンケートを分析することでFDの成果や課題を明らかにする（研究目的）**。
報告	IR担当者養成研修の成果と課題	大学設置基準では、SDは職員の能力を向上させるだけでなく、向上させた能力を仕事に活用することが目的とされている（研修転移）。そこで、**SDの研修転移に着目し、特にIR担当者向けの研修を対象として、行動変容や業績向上の成果と課題を明らかにする（研究目的）**。
報告	不登校学生への支援事例を用いたFD開発	学生支援における教職協働の取組について先行研究における課題を整理したうえで、**開発したFDプログラムの開発経緯や内容を整理するとともに、参加者アンケートをもとに効果検証を行う（研究目的）**。
報告	理工学教育に関わる教員に必要なFDの構築	理工学教育共同利用拠点の認定前や認定後8年間において実施してきた**FDプログラムについて、内容やプログラム体系を整理するとともに、参加者数や参加者の反応ともに、拠点の取組の意義を述べる（研究目的）**。
報告	オンラインFDの開発と評価	高等教育機関におけるFDネットワークにおいて、**複数大学の担当者が3年間にわたり共同開発してきた同時双方向型のオンラインFDの内容や開発経緯を解説し、参加者アンケートをもとに効果検証を行う（研究目的）**。

③FDや研修プログラムの開発やその効果を検証をしたもの

★調査対象や方法・分析方法や妥当性の説明・考察

研究テーマ	調査対象	効果検証の方法	分析・考察方法
TPチャート及び作成研修の開発と評価	TPチャート作成研修参加者（2回）	アンケート調査（研修前・後；動物カードをコードとし、前後の回答を匿名性を確保して対応付ける）	研修前後の同設問の回答を数値化（効果量r（Rothenthal,1994）を算出）して比較する。TPチャートの作成と既存モデルとの比較して考察する。
理工系FDプログラム開発	FD参加者（9回）	アンケート調査（FD参加直後）	FD開発（ver1～ver5）の改良点について、参加者アンケートをもとに考察し、改善された経緯が示されている。
IR担当者養成研修の成果と課題	研修受講者	アンケート調査（研修3か月後） カークパトリックの4段階モデルをもとに設問を設計	先行研究をもとに研修転移の分析枠組みを整理し、IR担当者の能力要件も整理している。その上で設計された調査項目について考察をしている。
不登校学生への支援事例を用いたFD開発	FD参加者	FD参加者の成果物 アンケート調査（FD参加直後）	参加者アンケートの結果をもとにして、当該FDプログラムの成果と課題を考察する。
理工学教育に関わる教員に必要なFDの構築	プログラム参加者（各FD）	参加者数の推移 FD参加者へのインタビュー結果（5名；詳細不明）	理工系拠点で実施している38のFDプログラムを体系的に整理し、開発経緯や参加者数の推移を考察する。また、参加者アンケートの結果の概観とFD参加者へのインタビュー結果をもとに考察する。
オンラインFDの開発と評価	FD参加者（3か年）	アンケート調査（FD参加直後） フォローアップアンケート（FD参加1年程度後）	カークパトリックの4段階モデルを引用して、3か年のアンケート結果の経年比較、フォローアップアンケートの結果を3群に分けて分析する。自由記述と実際のFDの特徴とを照らし合わせながら考察する。

共通する特徴：開発したFDやツール・プログラムについて、その内容や開発過程を詳細に（比較的多くのページを使って）記述している

『高等教育開発』投稿論文の傾向まとめ

◆論文

- テーマは、「学生の能力開発や成長過程を明らかにするもの」、「注目されている教育トピックに関する実態や課題の調査」が多い
- 課題設定は、先行研究を整理し、その**課題（不十分な点）を明確に記述**して本研究課題設定や意義や価値を説明している
- 分析方法は、先行研究などをもとにして**分析方法の妥当性を説明**している
- 考察では、**量的データや質的データの両方を活用**したり、**先行研究の結果と比較をして説明**している

◆報告

- テーマは、「プログラム開発やその効果検証」が多い
- **FDやツールの内容・開発過程を具体的に記述**している
- 実践報告ではなく効果検証も行われており、**調査結果と開発したFD等の特徴を踏まえてその成果を考察**している